

日韓電話会話の構造と発話の「重なり」

都 恩珍

キーワード：重なりの類型、電話会話の下部構造、協調性、主導性

1. はじめに

電話をかけるという行為は、我々の日常生活において欠かせない情報交換の行為であり、繰り返し行う言語行動でもある。ベルの呼び出し音が鳴り、受話器を取る。呼び出し音に対する応答後、相手を確認し、挨拶が交わされ、用件を切り出す。用件は、除々に終了へと移行し、最終的には別れが告げられ、受話器を戻す。電話会話の受け手とかけ手の間では、このような一連の流れに沿って多様かつ複雑な言語現象やストラテジーが使われ、様々な知識や情報が共有・伝達されていく。本稿では、日常的に起こる自然な現象であり、何らかの仕組みのある有意義な言語現象の一つとして、発話の「重なり」(以下重なり)を取りあげ、電話会話の基本構造に基づき、日本語と韓国語における電話会話の構造と発話の「重なり」の関連性について検討したい。

2. 研究目的及び方法

本稿は、電話会話の中で重なりがどのように働き、反映されているかを検討することによって、日本語と韓国語における電話会話の構造と重なりの体系との関わりを説明しようとする研究である。考察に当たって、第4章では両言語の均一な性格の言語資料を基にし、同一の判断基準を設定した上で両言語の電話会話の構造体系を比較する。第5章では重なりの体系的な構造を分析するために重なりそのものの事柄が統括的に把握できる分析フレームを提案し、その分析フレームを用いて重なりの類型及び機能性を導き出す。第6章では第4章と第5章の結果を踏まえ、電話会話の下部構造においてどのタイプの重なりがどのように働き、どのように会話の進行を導いているかを検討し、両言語の会話構造と重なりの特徴を関連づけて述べる。

分析に使用する言語資料は、1999年9月から2002年9月まで収録したもので、日本語母語話者34組(68人・218分9秒)と韓国語母語話者33組(66人・220分1秒)による電話会話である。尚、調査協力者は、全員親しい関係(友人及び家族)同士である。日本語の資料(以下J)は、女性47人、男性21人と女性の協力者が多く、女性同士の会話が17組、男性同士の会話が5組、異性同士の会話が12組である。年齢は、10代(19歳)が13人、

¹ ある一時点において、二人の話者が同時に話し、二人の発話の一部または全体が重複(overlap)することを発話の「重なり」とする。

20代が8人、30代が40人、40代が4人、50代が3人であり、同年代同士の資料は21組、非同年代同士の資料は13組で、総合的に言うと30代女性同士の会話が主流である。一方、韓国語の資料(以下K)は、女性53人、男性13人とJと同様に女性の方が多く、女性同士の会話が16組、男性同士の会話が3組、異性同士の会話が14組である。年齢は、20代が2人、30代が60人、40代が4人であり、同年代同士の資料は27組、非同年代同士の資料が6組で、Jの資料と同様に30代女性同士の会話が主流である。

3. 先行研究及び本稿の位置付け

電話会話に関する研究では、電話の会話を主に開始部、主要部、終結部に分けている。電話会話の研究のもっとも先駆的な研究として知られている Schegloff(1968)は、電話の会話がどのようにして開始されるかを明らかにしようとした。Godard(1977)は、フランス語における開始部の分析を行い、英語との相違を明らかにしようとした。Schegloff & Sacks(1973)らは、会話が一定の手続きを経て終結することを始めて明らかにした。Clark & French(1981)らは、Schegloff & Sacks らの提示したモデルの修正を試みた。

日本語においては、橋内(1985)が用件に入るまでに用いられる表現を分析し、岡本(1990)は日本語と英語における終結部を比較している。熊取谷(1992)は電話会話で頻繁に用いられる「はい」、「もしもし」、「じゃ」の表現が電話会話の開始部と終結部においてどのような機能を果たしているのかを解明しようとした。今石(1992)は電話会話にどのようなストラテジーが使われているのかについて統合的に考察しており、小野寺(1992)はエスノメソドロジ的な立場から日米の文化的相違を述べている。これまでの電話会話の研究は、電話会話を開始部、主要部、終結部の3つの大きな構成単位として考えるのが主流であった。しかし、電話での会話は、参加者同士の関係やその場の状況、電話をかけた目的などによって用件のみで終了される場合もあれば、周辺的な話題が用件より長く続く場合もあり、いっそう多様なパターンがあるように思われる。そこで本稿では、電話会話を開始部、導入部、主要部、副主要部、前終結部、最終結部の6段階に細分化し、多様な電話会話のパターンを幅広く受容できるような下位分類を行うことにした。

一方、重なりをめぐる研究では重なりに対する立場によって発話権の侵害や話順をめぐる争いとして否定的な見地で捉える見解²や聞き手に対する話し手の連帯感や熱心さ、相手の話に対する興味・関心の深さを示し、コミュニケーションを促進する肯定的なものとして捉える見解がある³。そして、菅原(1998)のようにアフリカのグイ族(ブッシュマン)の同時発話を通してグイ族の人間関係を説明しようとした文化人類学的な研究もある⁴。

日本語の重なる研究においては、機能面における重なる分類を中心とした研究や、

² Sacks & Schegloff & Jefferson(1974)、レヴィンソン(1990)、山崎・好井(1984)らなど。

³ Tannen(1984)など。

⁴ 菅原によると、イギリス人の会話では同時発話の持続時間の平均が0.5秒以下であるのに対し、グイ族の同時発話は大変長く、4秒、5秒は普通であるという。グイ族は、他者に聞く義務を与えて拘束することなしに話す権利のみを行使するからであると説明している。

場面や対人関係との関わりを中心にした研究、重なりを発話権利との関わりから付随的に生じる現象として取り扱った研究などが主流である⁵。先行研究によると、重なりの生じる要因としては会話参加者の親疎関係、心理状態、会話の運び方の癖、話題に対する関心度、談話展開の難易度といったその場の状況などが挙げられ、日本語の重なりは先行発話への同意、共感、関心などを積極的に示し、会話を促進させ話者同士の連帯感を強めるといった協力的な性格を持つものとされている。姜(2000)は、韓国語と日本語の会話における重なりの特徴を比較しており、日本語話者が参加者同士の人間関係を大切にし、会話に積極的に参加し、二人が協力しあって発話を共同で作り上げようという共話的な姿勢で会話を進めているのに対し、韓国語話者は自分の主張を相手にはっきり示し、一人で発話を成立させようとするなど、話し手と聞き手の立場の違いを明確にする対話的な姿勢で会話を進めていくと述べている。これまでの重なりをめぐる研究は、機能面での重なりの分類が中心となった研究、場面や対人関係との関わりを中心にした研究、発話権利との関わりから付随的に生じる現象として評価した研究、人間関係をベースにしたコミュニケーションと重なりとの関係を中心にした研究が主流であった。しかし、場面や人間関係、発話権利などといった要因は重なりの周辺的な要因に過ぎず、重なりそのものに関わる本質的な要素ではないと思われる。そこで本稿では、発話者のあらゆる発話意図や発話意識から生み出された結果である言語的事実を手係りにして重なりの仕組みを明らかにすることを通して、日本語と韓国語における電話会話の相違を説明することを目的としている。管見の限り、このような対照研究は皆無に等しいと思われる。

4. 電話会話の構造

4.1 電話会話の下部構造

言及のように、これまでの日本語や欧米語の研究では電話会話を開始部、主要部、終結部という3つの構造で分類してきた。しかし、本稿の言語資料からは電話会話が開始され、用件が伝わり、終了するといった従来の分類パターンとは多少異なるパターンが観察された。電話による会話ではかけ手と受け手の目的が明確な場合が多いが、親しい者同士の会話では用件伝達のみが主な目的ではないように思われる。例えば、連絡事項の知らせが目的となる場合もあれば、家族や友人の近況を尋ねることが目的となる場合がある。まして友人同士では雑談が主な目的となることさえある。用件が十分に伝わったとしても会話はなかなか終了されず、その場で思いついたことを話題にすることや以前に対面した時の出来事を話題にすることなどは稀ではない。本稿の言語資料においては、電話での会話は電話をかけた主要な目的と周辺的な話題とが上手に絡み合って成り立ちその主要話題と周辺話題との絡み合いが相互の良き人間関係の構築に貢献しているように思われる例が観察された。従って本稿では、電話会話の構造をこれまでの3段階の構造とは異なる6段階に分類した。開始部から主要部までに導入部という中間段階を設けた。そして、電話会話の中

⁵ 吉田(1989)、藤井(1997)、生駒(1996)など。

心部を第一用件が伝えられる主要部とそれ以外の付随的な話題が交わされる副主要部に分けた⁶。さらに終結部は、自然な会話終了を導くための前段階としての前終結部と、最終的に終了が告げられる最終結部に区別した。しかし、電話会話の開始→用件→終了といった3段階構造は状況や場合に左右されず必ず現れる必然的な構成要素であるが、本稿で取り入れる導入部、副主要部、前終結部は、状況や場合によって省略・短縮されうる非必然的構成要素であることをここで断っておきたい。以上の内容を中心に、本稿における電話会話の6段階下部構造を【表1】に示す⁷。

【表1】親しい者同士の電話会話における下部構造

段階	主な内容
開始部	電話のベルに応答し、電話会話を開始する段階。呼び出し、応答、名乗り、相手確認・認定などが行われる。
導入部*	名乗りなどによる自己提示および相手認知後、第一用件を切り出すまでの段階。定型化された挨拶、電話をかけている時の状況、近況や健康などの質問、以前接した時のことへの言及、非接触時間への言及、天気の話など、挨拶行動が行われる ⁸ 。
主要部	電話をかけた第一の用件や目的などが伝えられる段階。
副主要部*	主要部で持ち出された第一話題からの連想話題や突然思いついた話題などが交わされる段階。主要部での出現語彙、関連事件・物事からの連想を出発点とする話題や主用件の付随的な話題が持ち出される。
前終結部*	自然な会話終了のための段階として、主要部のまとめ・総括、繰り返し、念押し、確認、会話から導き出される行動の確認、相手の家族への挨拶、電話した理由、健康・幸せへの配慮、再接触の計画の言及、最終終了を促す先行発話、謝り・感謝・励ましなどの儀礼表現が交わされる。
最終結部	最終的に電話会話を終了するという合図として、主に応答詞による別れの挨拶や常套語の応答ペアーが交わされる。

*：省略・短縮可能な段階

4.2 日本語と韓国語の電話会話における構成要素の相違⁹

言語資料の考察結果、JとKの下部構造を構成している要素にはいくつかの相違点が見られた。本節では構成要素の相違について簡単に触れておきたい。まず、開始部における電話のベルに対する第一応答を比較すると、Jの表現形式は「もしもし」のみならず、「はい、もしもし」、「もしもし+名乗り」など、多様な表現形式が現れていた。そして、かけ

⁶ 第一用件の見分けは容易ではないが、本稿ではかけ手の発話内に言語で表明される目的を第一用件と見なし（例えば、「聞きたいことがあるんだけど、～」「お茶会の件なんだけど、～」など）、発話内に目的が表明されない場合は、開始部あるいは導入部の終了後、かけ手によって持ち出される第一話題を第一用件と見なした。

⁷ 6段階の下部構造は、原則的に時間軸に沿っているが、「主要部」と「副主要部」は「主要部→副主要部→主要部→副主要部」のように交互に繰り返される場合もある。しかし、各構造を区別する明瞭な指標を提示することは容易ではない。本稿では発話された言語形式や表現内容などを判断指標としているが、この点についてはよりいっそうの検討が必要であろう。

⁸ 本稿では、「こんにちは」「どうも」などのような定型化された挨拶表現のみならず、上記の内容をも良き人間関係維持のためのストラテジーの一種として「挨拶行動」と捉えている。

⁹ 詳細な内容については、都(2001)を参照されたい。

手・受け手の自己提示（名乗り）が相手確認よりも先に行われる傾向が見られた。一方、Kは呼び出しベルに対する第一応答は主に「여보세요（もしもし）」のみの表現形式で現れ単一的であった。そして、かけ手・受け手の自己提示より相手の確認が先に行われる傾向が見られた。つまり、Jの場合、受け手は「もしもし、（自己名）ですが」、かけ手は「私は（自己名）ですが、（相手名）さん、いますか」の提示・認定のプロセスを経る傾向にあるのに対し、Kの場合は受け手・かけ手共に「（相手名）ですか」「私は（自己名）です」のパターンで提示・認定の段階を経る傾向にある。導入部においては、Jの場合は定型化された挨拶表現・儀礼表現が多く現れていたのに対し、Kは電話をかけている当時の状況の言及が多く現れていた。導入部から主要部に移行するための用件切り出しの標識を比較すると、Jの場合は、用件切り出し標識がない場合と「あのさ」「あの」「あのね」を用いる場合の割合がほぼ均等であったのに対し、Kの場合は用件切り出し標識を用いずに主要部へ移行する場合が最も多く、他には「왜 전화했나하면（どうして電話したのかと言うと）」「다름이 아니라（電話したのは他の理由ではなく）」など、メタ言語的な表現も多少使用されていた。前終結部においては、J・K共に再接触への言及が最も多く、その次に、Jは主要部の内容のまとめ・総括・確認が多く現れたのに対し、Kは家族や周囲の近況への言及が多く現れた。最終結部においては、終了を告げる応答詞として、Jは「はい」や「はいはい」「うん」などが、Kは「에에(はい)」「응(うん)」「어-(うん)」などが最も多く使われていた。その次に、Jは「じゃ（じゃあね）」「また（またね）」の他に「お休み」「バイバイ」などの表現の順に使われており、他にも謝罪や依頼、励まし、感謝などの儀礼表現がよく使われていた。一方、Kは「그래（これまでの話題はこれで十分であることを表す談話標識語）¹⁰⁾」や「쉬세요(お休み?)」「들어가(入って?)」などのように電話接触の以前の状態に戻ることの言及¹¹⁾、「끝을(切るね)」のような電話終了行為そのものの言及の順で使われていた。以上、JとKには全体的な構造や基本的な構成要素に類似する傾向はあるものの、相違点について概観した。

5. 発話の「重なり」の類型化

5.1 4段階の判断条件

本章では重なりの体系的な構造分析を行い、重なりの機能を導き出すための4段階の判断条件を提示したい。4段階の判断条件とは、第一に「発話形式」、第二に「発話中止」、第三に「発話修復」、第四に「話題の連続性」である。

「発話形式」は、重なる発話同士の形式により、「実質発話//¹²⁾実質発話」、「相づち¹³⁾//

¹⁰⁾ 이한규(1996)

¹¹⁾ 「쉬세요（お休み？）」は日本語訳として最適ではないが、電話をかけたことは相手の休憩を邪魔したことになり、相手が電話を切って休んでいた元の状態に戻ってほしいことを願う意味合いの表現であると筆者は考える。同様に「들어가（入って？）」も不自然な日本語訳であるが、電話に出る行為に対して電話を切って元に戻ることを入る行為として捉えた表現ではないかと筆者は考える。

¹²⁾ 「//」は重なりを表し、「//」の直前項形式と「//」の直後項形式が重なることを指す。

相づち」、「相づち//相づち+実質発話¹⁴」、「実質発話//相づち」、「実質発話+相づち//相づち+実質発話」、「実質//相づち+実質発話」の6つに分類される。発話はその形式によって働きかけ性が異なる。実質発話は、実質的内容の積極的な表現や言語形式を含むものであるために聞き手への働きかけは他より強い。一方、相づちはそのような言語形式や表現を含まないものとして他より聞き手に対する積極的な働きかけはない。相づち+実質発話は、発話内で相づちの機能が同時に働くものであるため、聞き手に対する働きかけが実質発話より積極的ではなく、相づちよりは積極的であると考えられる。

「発話中止」は、発話の中止があるかないかで区別される。発話の中止がない場合は、聞き手の発話と話し手の発話が同時に優先されることを意味する。この場合は、発話の修復を見分ける段階で最終的な発話権の優位を判定することになる。一方、発話の中止があった場合は、「片方中止」と「両方中止」があるが、「両方中止」は中止が生じても瞬時のポーズ後、必ず片方の発話が開始されることになるため、中止がない場合と同様なプロセスで扱う。「片方中止」の場合は、先行発話の中止であるか後行発話の中止であるかによって「話し手中止」「聞き手中止」に分類される。前者は重ねてきた発話が優先され継続されることを意味し、後者では重なる前から続いていた発話が継続されることが示唆される¹⁵。

「発話修復」は、修復のきっかけが誰によるものかによって「自己修復」と「相手修復」に分類される¹⁶。「自己修復」は、話し手(あるいは聞き手)の発話が中止され、話し手(あるいは聞き手)自らによって開始されることである。重なりによって中止された発話を自ら開始するという事は、重ねてきた相手の発話に対して興味を示すことや相手の発話権を配慮することよりも自分の発話を続けるという意思表示、自己発話を優先するという言語行動である。一方、「相手修復」は話し手(あるいは聞き手)の発話が中止された場合、重ねてきた聞き手(あるいは話し手)が自己発話を辞退し、話し手(あるいは聞き手)の発話を拾い発話を再開する、または相手の発話内容に合わせることである。「相手修復」は発

¹³ 本稿では、小宮(1986)、黒崎(1987)、劉(1987)、松田(1988)、ザトラウスキー(1993)、Clancyら(1996)、堀口(1997)の研究を参考にし、本稿の言語資料の考察を踏まえ、相づちを次のような条件を満たすものとした。①聞き手によって送られる短い表現、特に感動詞や応答詞を中心にするいわゆる相づち詞 ②「聞いている信号」「理解している信号」「同意の信号」「否定の信号」「感情の表出」 ③話順を取る直前に現れる前触れとしての相づち ④聞き手によって送られる笑い声やポーズ、ため息などの非言語行動 ⑤自己発話内の相づち ⑥質問や疑問、確認、呼びかけ、命令に対する相づち詞による応答 ⑦思案中による言いよどみ

一方、次のようなものは相づちとして扱わない。①Yes-No 疑問文に対する返答 ②聞き返し、オーム返し、繰り返す、先取り ③思いつき、気づきの嘆声

¹⁴ 「相づち+実質発話」の付随類型として、「実質発話+相づち」「相づち+実質発話+相づち」「実質発話+相づち+実質発話」など、様々な組み合わせの複合発話があるが、本稿では同類のものとする。

¹⁵ 本稿では、重なりが生じる時点を中心に前方の発話を「先行発話」「話し手発話」「重ねられ手発話」と称しており、同時に前方の発話主について「先行発話者」「話し手」「重ねられ手」と呼んでいる。そして、「重なり」の後方の発話および発話者については、「後行発話」「聞き手発話」「重ね手発話」「後行発話者」「聞き手」「重ね手」と呼んでいる。

¹⁶ 「発話修復」とは、重なりによって発話の中断があった場合、中断された発話や話題が直ちに再開されることを指す。そして、発話の中断がない場合の発話の継続は「発話修復」とは見なせず「発話継続」として扱う。「発話継続」は重なりが生じた発話が終了した後、誰が発話を続けるかによって「重ね手継続」「重ねられ手継続」に分類される(表2参照)。

話の中止は生じたものの、中断された相手の発話に興味を示し、相手を配慮することで人間関係の回復を図る方策であると考えられる。

「話題の連続性」は、重なり前後の話題における類縁関係によって「話題維持」、「話題拡大」、「話題転換」に分類される。「話題維持」はある同一情報に対する賛成、反対、同意、疑問、驚き、感心などを含む意思や感情表明及び同一情報の連続を指す。「話題拡大」は共有知識に基づいた常識的類縁性¹⁷のある一連の流れを指す。「話題転換」は「話題維持」と「話題拡大」以外のものを指す。重なり前後の発話で取り上げられているものごとの類縁関係の把握には発話に出現する名詞句や述部などに注目した。即ち、重なり前後に取り上げられている語彙や語句の類縁関係で判定するのである。類縁関係については以下のように分類される。即ち、重なり前後、あるいは重なり内の出語句が全く同一なもの、出語句が形式的に類似しているかあるいは一部変形・派生されたもの、質問-返答、挨拶-挨拶、呼びかけ-応答、勧誘・依頼-承諾・断り、命令・謝罪-応答のような応答ペアー、相手の発話に対する賛否表現・感情表現、中止された発話の続きであることが明確なものなどは類縁関係「強」のものと判断した。一方、重なり前後、あるいは重なり内の出語句同士の関係が話題になっているものごと同士の常識的世界における種々の関係にある場合には類縁関係「中」のものと判断した。そして、重なり前後の出語句における関連性が希薄で思いつきや気づきの表現、話題提示の標識を伴う表現については類縁関係「弱」のものと判断した。本稿では、類縁関係「強」と判断されたもののみを「話題維持」とし、類縁関係「中」と「弱」はそれぞれ「話題拡大」「話題転換」と見なした。

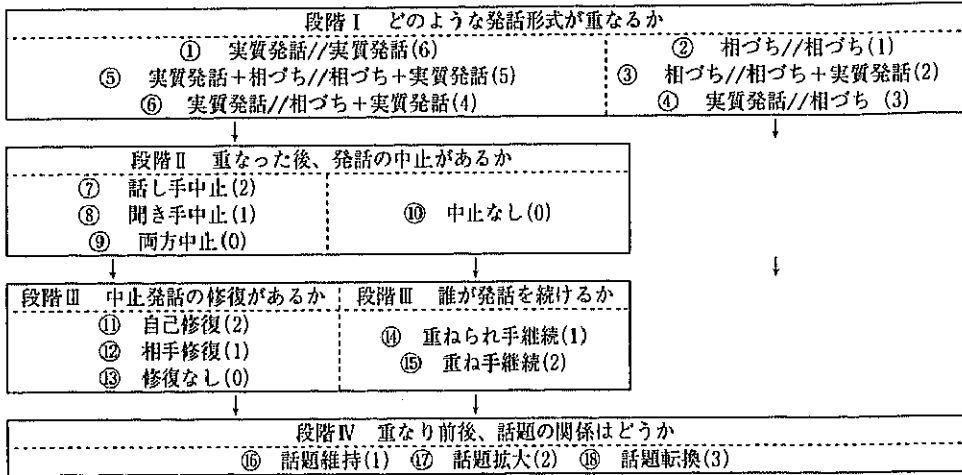
5.2 類型化のプロセスと各類型の特徴

以上の判断条件に従い、重なり類型化は【表2】のようなプロセスによる。【表2】には重なりの会話への影響を比較するために、会話への主導性、協調性を中心にその度合いを点数化して付け加えた。協調的な重なりとは、主に発話の付随的な表現に発生し、後行発話者が既に先行発話者の情報を理解・予期した上で生氣するもので、次の話順に自己を選択する目的で意図的に相手から話順を取るわけではなく、相手の発話を尊重しつつ、先を予想し、援助することを主目的とするものである。一方、主導的な重なりとは、協調的な重なりとは違って自分の意見を述べたり、相手の発話内容に対して否定・不同意を積極的に述べたり、新話題を持ち込んだり、思いついた話を活発に切り出す目的で相手から話順を取るため、話題の内容、話し手-聞き手の役割を強制的に変えるが、参加者にとって話題拡張や幅広い情報の提供・共有をもたらすものである。つまり、協調性は相手の発話の調子に合わせて相手発話を優先する性質、主導性は相手の発話を遮ることがあっても自分の話を重視する性質を表す概念として取り入れた。主導性の強い重なりであるほど高い点数がつけられる。点数は、各段階における重なりの種類の数を最高点とし、その段階でもつ

¹⁷ 例えば「野菜とほうれん草」「大雨と台風」「葬式と黒のバックと靴」のような関係である。これについては、石綿(1969)が百科事典的類縁性と名づけたものを参考にした。

とも主導性の強い種類から低い種類へと順につけられる¹⁸。

【表2】重なりの類型化のプロセス



()の中は点数

重なりをめぐる判断条件は、言及のように会話に積極的に参加し主導するか、相手の話の調子に協調的に合やすかで大別される。即ち、会話を自ら主導的に導くための自己優先的なものであるか、相手に調和して協力的に導くための相手優先的なものであるかで記述することができよう。

【表3】重なりの各類型の特徴と機能性¹⁹

類型	点数	内容
類型Ⅰ	2	相づち系発話の重なり、情報の展開無し
類型Ⅱ	3	
類型Ⅲ	4	相づち系発話の重なり、情報の展開有り
類型Ⅳ	5	
類型Ⅴ	6	半実質的発話の重なり、自発的な話順の譲渡
類型Ⅵ	7	主に半実質的発話の重なり、相手配慮的な話順移行
類型Ⅶ	8	半実質的または実質発話の重なり、既知の情報共有のための話順取り合い
類型Ⅷ	9	半実質的または実質発話の重なり、未知の情報提供のための話順取り合い
類型Ⅸ	10	主に実質発話の重なり、自己発話の維持
類型Ⅹ	11	主に実質発話の重なり、自己発話の優先
類型ⅩⅠ	12	実質発話のみの重なり、自己発話の主張
類型ⅩⅡ	13	

【表2】を通して抽出される重なりの組み合わせは80タイプにもなる²⁰。この80タ

¹⁸ 例えば、Ⅰ段階の重なりの種類は6つある。その中で最も主導的な重なりの①には6点、その次の⑤には5点、最も主導性の弱いものの②には1点をつけた。ただし、無標的な判断条件に当てはまる種類には0点をつけた。

¹⁹ 相づち系は「相づち//相づち+実質発話」、半実質的発話は「実質発話//相づち+実質発話」を指す。

イブの重なりを主導性と協調性を取り入れ点数別に分類すると、類型Ⅰ(2点のもの)から類型ⅩⅡ(13点のもの)までの12種類の重なりにまとめることができる。【表3】には12種類の重なりの特徴を示した。

6. 電話会話の構造と「重なり」

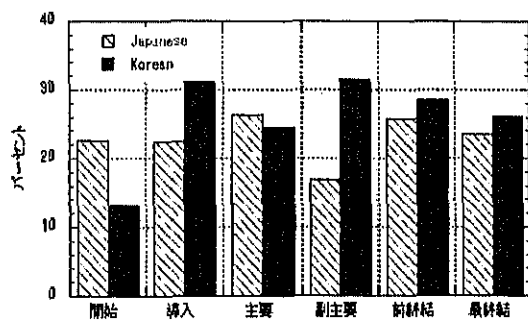
電話会話の構造と重なりとの関係を考察する前に、まずJとKの会話における重なりの出現頻度を概観しておきたい。JとKには果たしてどれぐらいの重なりが生じているのだろうか。【表4】に全体発話数に対する重なりの比率を表した。

【表4】全体発話数と重なりの割合

	全体発話数	重なり数	割合
J(218分9秒)	6928発話	1499回	21.6%
K(220分1秒)	6645発話	1711回	25.7%

【表4】の結果より、全体発話数に対する重なりの比率は、Jが21.6%、Kが25.7%でKの重なり率が若干上回っていることがわかる。言い換えれば、Jは約4.6発話に一度の重なりが起こっており、Kは約3.9発話に一度の重なりが起こっていることになる。そして、Jは約8.7秒に一回、Kは約7.7秒に一回の重なりが生じていることになる。ちなみに、Jの1発話当たりの平均所要時間は約1.9秒、Kの場合は約2秒であり、一発話当たりの平均所要時間はほぼ同様であると言える。このことより、Kの方がJに比べ発話同士の重なりをより頻繁に起こしていることがわかる。この結果を踏まえ、次節からは、両言語における重なりの機能と電話会話スタイルの異同を考察していきたい。

6.1 電話会話の下部構造と「重なり」



【図1】下部構造における重なりの頻度

本節では、電話会話の各下部構造と重なりとの関係を考察したい。【図1】は、各下部構造における発話数に対する重なりの比率を換算したものである。

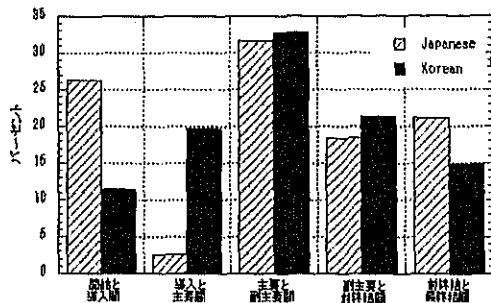
【図1】から分かるように、Jは全ての下部構造において重なり率が約1割強～2.5割程度でほぼ均等に占められているが、Kは開始部を除く全ての下部構造において約2割以上の重なりが出現されて

²⁰ 例えば、類型Ⅰ：②+⑯、類型Ⅱ：②+⑰、類型Ⅲ：③+⑰、類型Ⅳ：④+⑰、類型Ⅴ：⑤+⑨+⑱+⑯、類型Ⅵ：⑥+⑧+⑪+⑯、類型Ⅶ：⑤+⑦+⑬+⑯、類型Ⅷ：⑤+⑩+⑮+⑰、類型Ⅸ：⑥+⑦+⑪+⑰、類型Ⅹ：①+⑨+⑪+⑯、類型ⅩⅠ：①+⑦+⑪+⑰、類型ⅩⅡ：①+⑦+⑪+⑯などの仕組みがある。

いる。特に、導入部と副主要部における重なりは3割以上、その次に前終結部、最終結部、主要部における重なりも約2.5割以上とほぼ均等に現れており、開始部の重なりのみが著しく低い比率を表している。各下部構造におけるJ・K間の差を見ると、開始部を除く全ての下部構造においてKの重なり率はJを上回っているか、ほぼ同様の傾向にある。

しかし、開始部におけるKの重なり率がJを遥かに下回っているのはなぜだろうか。そのような結果をもたらした原因の一つを開始部における構成要素の相違から考えたい。4.2で述べたように開始部におけるJの表現形式は「もしもし」のみならず、「はい、もしもし」「もしもし+名乗り」など、多様に現れていた。そして、かけ手及び受け手の自己提示が相手認定よりも先に行われる傾向にあった。接触の頻繁な友人同士では、かけ手や受け手の自己提示の途中で既に相手を認知し、認知したことを何らかの言語形式を用いて表す場合が多い²¹。この際に発話の重なりは生じやすいのであろう²²。一方、Kは呼び出しベルに対する第一応答の表現形式がJに比べ単一的であり、さらにかけ手及び受け手の自己提示は省略され、声から認知した相手認定が優先的に行われる傾向があった。即ち、Kの場合、開始部において重なりを引き起こしうる要素の省略が他より重なり率を低くした原因の一つではなからうか。

6.2 下部構造間の境界部と「重なり」



【図2】境界部と重なり

本節では、下部構造間の移行の瞬間と重なりに関係があるかについて調べたい。【図2】は、各下部構造の境界部に現れた重なり頻度を示したものである。【図2】を見ると、会話の主要部から後半、つまり主要部、副主要部、前終結部、最終結部の境界部における重なりの出現傾向は、J・K共に類似しているが、開始部から主要

部に至る会話の前半における重なりの出現傾向には多少の相違が見られることがわかる。開始部から導入部へと移り変わる境界部で、KはJより重なり率が低く、導入部から主要部へと移り変わる境界部でKはJより遥かに高い。開始部と導入部の境界部に見られる傾向については、開始部と導入部におけるJとKの言語行動の相違から説明したい。4.2で述べたようにJの場合、開始部と導入部には相手認定後、挨拶行動があるなど、一定し

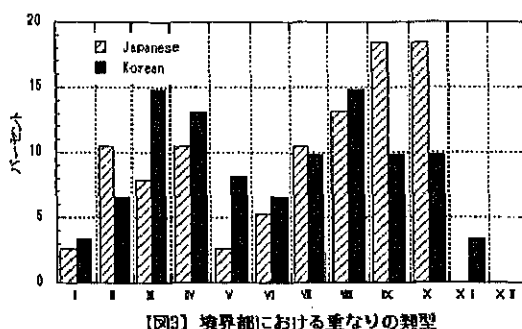
²¹ 山崎けい子(1997)は、日本語母語話者の開始部ではかけ手、受け手が用いる自己提示、認定のリソースは多様であるが、認定できたらすぐに相手にそれを伝えることが好まれ、それが相手との親しさを示す相互の談話の構成作りになるという。

²² 吉田(1989)によると、重なりは、呼びかけ、名乗り、始めの挨拶、終わりの挨拶、切り上げのことば、話題の発展・展開時、句末近くまたは句切れのないところに相づちの挿入時、相手の言いかけた質問、意見、説明内容を取るとき、単に話題を取る時に起こりやすく、重なりの類型には挨拶の重なりや相手の発話と相づちの重なり、相手の意図を察して割り込んだことによる重なりなどがある。

た流れがあり、定型化された儀礼表現などの挨拶行動が互いの既知情報として働き、重なりを引き起こす要因となったのではないと思われる。一方、導入部と主要部の境界部におけるKとJの著しい相違は、主要部に移行するための用件切り出し標識との関わりがあるように思われる。4.2で述べたようにJの場合は「あのさ」「あの」「あのね」を用いて主要部に移行することを示す傾向にあるのに対し、Kの場合は用件切り出し語を用いずに突然主要部へ移行する場合が最も多い傾向にあった。即ち、突然の未知情報の提供が以前に持続されていた情報との重なりを引き起こした原因として働いたのではないかと考えられる。

それでは、JとKは会話を進行させるためにどのような重なりを用いてどのように会話の流れを調節しているのだろうか。それを調べるために【図3】に境界部においてどのタイプの重なりが出現されているか、その傾向を示した。

【図3】を見ると、Jでは下部構造間を移行する際に、類型IX・Xが最も多く用いられていることがわかる。類型

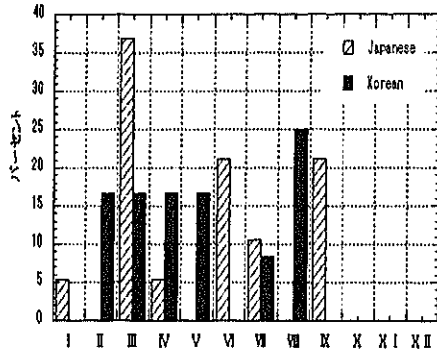


IX・Xは、主に実質発話が重なり、自分の発話を維持・優先する積極的な機能性の類型である。Jは会話を進行させるために、次の段階への移行を試みる手段の一つとしてこのようなタイプの重なりを使っていると説明される。一方、Kは主に類型III・IV・VIIIの重なりを用いて次の段階への移行を試みる傾向にある。類型III・IVは、相づち系発話の重なりによって話題が拡大・展開されていくものであり、類型VIIIは主に半実質的な発話の重なりによって未知の情報が提供されるものである。つまり、Kは次の段階への移行を告知する前触れとして、相づちと実質発話をより頻繁に併用する傾向にあると言えよう。

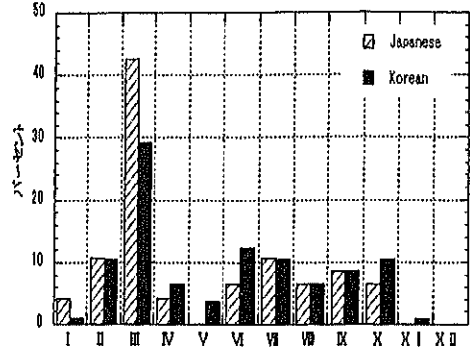
6.3 電話会話の各下部構造と「重なり」の類型

本節では、JとKの電話会話の各構造と重なりタイプの相違について検討したい。【図4】は開始部における重なりタイプ、【図5】は導入部における重なりタイプ、【図6】は主要部における重なりタイプ、【図7】は副主要部における重なりタイプ、【図8】は前終結部における重なりタイプ、【図9】は最終結部における重なりタイプを示したものである。

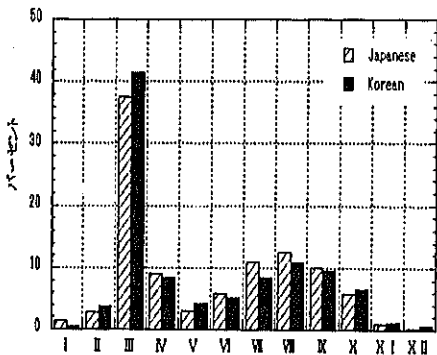
【図5】～【図8】を見ると全体的な構図は類似していることがわかる。「導入部」「主要部」「副主要部」「前終結部」における重なりタイプの各タイプの出現傾向は、J・K共に同様のパターンを表している。いずれも類型IIIの比率が最も高く、類型VII・VIII・IX・Xが若干現れているという傾向にある。そして、類型XI・XIIの比率は非常に低く、ほぼ現れていないとも言える。このことは、J・K共に会話の中心部や中心部付近において相づち系または半実質的な発話が中心となり、情報の共有・展開をもたらす働きの重なりが行われている



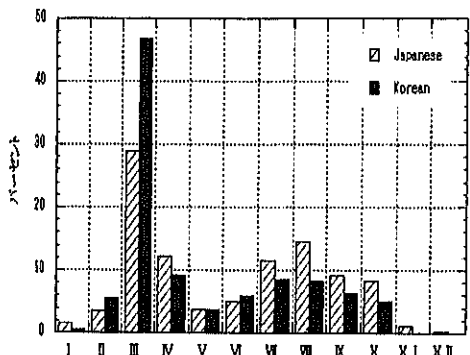
【図4】 開始部



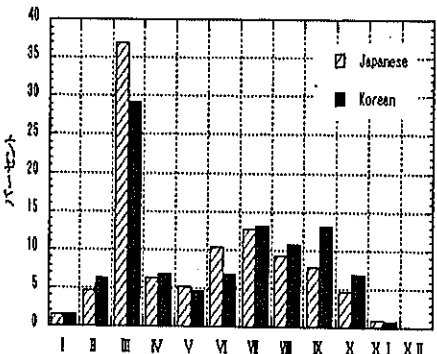
【図5】 導入部



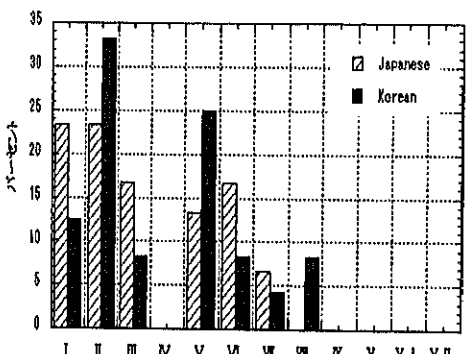
【図6】 主要部



【図7】 副主要部



【図8】 最終結部



【図9】 最終結部

ることを物語っている。言い換えると、J・K 共に重なりは相手の話を傾聴・理解していることを示す際に生じる順応的なものが主流である点、話順取りあいの際に生じえる諸トラブルに対して発話に相づちを上手に組み合わせることによって緩衝的に抑えている点、その際に生じる重なりが自分から持ち出す話題を中心に会話を主導していくためのものではなく、相手と協力しあいながら積極的に会話に参加し、相互が活発に接しているからこ

を発生されるストラテジーであるという点などで共通していると考えられる。

しかし、【図4】と【図9】を見ると開始部と最終結部における傾向は際だって異なっていることがわかる。開始部、最終結部共に、類型X・XI・XIIのような自己発話の優先的な重なりは全然現れていない。Jの開始部は主要部と同様、類型IIIの出現が多く、類型VI・IXが若干出現している。言及のように、開始部は呼び出し、名乗り、相手認定などが行われる段階である。Jはこの段階で応答詞を中心とした相づちを用いて呼び出しに応じ、相手認定を行い、類型VI・IXのように相づちと実質発話を併用して自己提示を行うような言語行動を取っていると考えられる。しかし、Kの開始部は類型VIIが最も多く、その次に類型II・III・IV・Vが均等に現れている。Kは自分からの情報提供のための重なりが最も多く使われており、相づちを使い、話題を展開していくための重なりを頻繁に行っている。言い換えると、開始部においてJは、相手の発話に対して早期に反応し、相手に調和する重なりが主流であるのに対し、Kは会話に活発に参与し、互いに自発的に話順を譲り合うか、あるいは相づちを先行させる方法でスムーズに話順を取り合うような重なりが主に用いられている。この点でKはJとは異なると言えよう。「最終結部」においては、Jの場合、相づち同士の重なり、あるいは相づちを併用した発話の重なりが主流であるのに対し、Kの場合は相づち同士の重なりは少なく、相づちを併用した発話の重なりが主流を成していることがわかる。このことには、最終結部における表現形式の相違が反映されていると思われる。言及のようにJの場合、主に応答詞によって最終結部の合図が交わされるのに対し、Kの場合は電話接触終了の言及や電話接触以前の状態に戻ることを望む表現が使われているため、相づちのみの重なりは出現しにくいものと考えられる。

7. まとめ

日本語と韓国語における電話会話の構造を6段階に下位分類し、さらに重なりを12類型にまとめ、両言語における電話会話の構造と重なりを考察してきた。その結果は以下のようなものである。

- ① J・Kいずれも相づち系発話の重なり(類型III)が最も多く、その次に協調性や積極性(類型VII・VIII・IX)で特徴付けられる重なりが主に使われており、主導的で自己発話の優先的な重なりはほぼ使われていない。
- ② 開始部や最終結部におけるJ・Kの表現形式の相違が、両者の重なる傾向の相違要因として働く。尚、開始部・最終結部においてJは相手の発話に調和しているが、Kは自ら活発・積極的に会話へ参与している。
- ③ Kの場合、先行研究などでは主導的で自己優先的な会話スタイルを営んでいるとされているが、本稿における見解は若干異なる。KはJより重なりが頻繁に生じている。Kの会話スタイルが主導的に捉えられるのは重なりの高い頻度が原因かも知れない。Kは、相づちを上手に併用することによって発話が重なることで生じうる会話へのマイナスの影響を緩衝的に処理しているように思われる。

これまでに電話会話における日本語と韓国語の重なる傾向を総合的に考察してきたが、対面会話との相違や両言語の表現形式との詳細な関わりをより厳密に明らかにしたい。その点については、今後の課題として残されている。

【参考文献】

- 生駒幸子(1996)「日常会話における発話の「重なり」の機能」『世界日本語教育』6, pp.185-199
- 石綿敏雄(1969)「構文解析自動化の研究Ⅰ—CLからの構文論の見渡し—」『電子計算機による国語研究報告』Ⅱ、国立国語研究報告34 秀英出版
- 今石幸子(1992)「電話の会話のストラテジー」『日本語学』11-9, pp.65-72
- 岡本能理子(1990)「電話による会話終結の研究」『日本語教育』72, pp.145-159
- 小野寺典子(1992)「エスノメソドロジーにおける電話会話の研究と日本語データへの応用」『日本語学』11-9, pp.26-38
- 姜昌妊(2000)「日韓男女大学生の会話対照研究—「重なり」を中心に—」『かほよとり』8, pp.39-49 武庫川女子大学大学院
- 熊取谷哲夫(1992)「電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析」『日本語学』11-9, pp.14-25
- 黒崎良昭(1987)「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野地方について—」『国語学』150, pp.109-122
- 小宮千鶴子(1989)「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』pp.43-62, 大東文化大学語学教育研究所
- ザトラウスキー・ポリー(1992)「セールスの電話の会話分析の試み」『日本語学』11-9, pp.51-62
- 菅原和孝(1998)『会話の人類学』京都大学学術出版会
- 杉戸清樹(1987)「発話のうけつき」「談話行動の諸相—座談資料の分析—」pp.68-106, 三省堂
- 陳姿蕢(2000)「日本語の談話におけるあいづちの類型とその仕組み」『日本語教育』108, pp.24-33
- 都恩珍(2001)「日・韓両言語における電話会話の一考察—構成要素の比較の試み」第52回朝鮮学会発表資料
- 橋内武(1985)「「もしもし」から用件に入るまで」『言語生活』407, pp.34-42
- 藤井桂子他(1997)「日本語の発話の「重なり」の特徴—「重なり」の機能の分析から」『人間文化研究学報』20, pp.268-277, お茶の水女子大学
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 松田陽子(1988)「対話の日本語教育学—あいづちに関連して」『日本語学』7-13, pp.59-65
- 山崎敬一・好井祐明(1984)「対話の順番取りシステム—エスノメソドロジーへの招待」『言語』13-7, pp.86-94
- 山崎けい子(1997)「日本語学習者の電話の会話の開始部—コミュニケーション能力と談話管理の観点から—」『武蔵野女子大学紀要』32-2, pp.31-42
- 吉田智子(1989)「発話の重なり現象の考察—電話会話の分析—」国立国語研究所報告 6, pp.76-93
- レヴィンソン(1990)『英語語用論』安井稔・奥田夏子(訳) 研究社
- 이한규. 1996. 한국어 담화 표지어 '그래'의 의미연구. 담화와 인지, 제3권 ;1-26
- Clark, H.H. and J.W. French. 1981. Telephone Codbyses. *Language in Society* 10.1, 1-19.
- Duncan, S. and D. Fiske. 1977. *Face-to-Face Interaction: Research, Methods and Theory*. Hillsdale, N. J.: Erlbaum
- Godard, D. 1977. Same Setting, different norms: Phone call beginnings in France and the United States. *Language in Society* 6 ; 202-219
- Patricia M, Clancy, Sandra A. Thompson, Ryoko Suzuki, Hongyin Tao 1996. The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics* 26 ; 355-387
- Sacks, H, Schegloff, E.A. and G. Jefferson. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50:4 ; 696-735
- Schegloff, E.A. 1968. Sequencing in conversational opening. *American Anthropologist* 70:6 ; 1075-1095.
- Schegloff, E. A. & Harvey Sacks, 1973. Opening up closings. *Semiotica* 8 ; 289-327
- Tannen, Deborah. 1984. *Conversational style: Analyzing talk among friends* Norwood, N.J.: Ablex and the United States. *Language in Society* 6 ; 202-219